
魔法少女リリカルなのは 次元を超えし転生者

十六夜・零夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 次元を超えし転生者

【Nコード】

N1274BA

【作者名】

十六夜・零夜

【あらすじ】

現代系大学生オタクであった時枝楓は少女のパンツに埋もれて死んだ。

しかし、それが輪廻から弾かれた死であった為、自称神の実験の協力者として『リリカルなのは』の世界に転生することになった。

所謂ハーレム系、チート系、おそく主人公最強系(?)の作品です。

苦手な人はすぐにでも後方に直進してください。

第1話 転生理由、実験目的（前書き）

初めまして・・・十六夜・零夜いざよひ・ねいやと申します。

初投稿です。

更新ペースは出来るだけ速くしたいと思います。

第1話 転生理由、実験目的

俺の名前は時枝楓、ときえだかえで漫画やゲームが好きな所謂オタクと呼ばれる存在であるし、むしろオタクであることを誇りに思っている一般的な大学生だった。

そう、「だった」だ。

俺が夏のコミケに行った帰り、発車する電車に乗り込もうと駅の階段を掛け登ったとき事件は起きた。

前方にいた中学生らしき少女が俺と同様に電車に乗りこむために走っていたが、階段に足を躓いてしまいこちらに落下してきたわけだ。

俺は避ける事も可能だったが、その時見てしまった。

彼女が緑色の縞パンを履いていたことに・・・

結果、俺は彼女の下敷きになって階段からずり落ち何度も頭を強打して死んだ。

オカズになるだろうブツを楽しみにしていた分、本能的にリアルな刺激に弱っていたらしい。

最後に今日買ってきた同人誌だけでも読みたかった。そこで俺の意識は飛んだ。

「あゝ、悪い。キミ殺しちゃった」

「あ、因みに俺、いわゆる神とか言うやつ。短いながらもよろしく」
男はそう言いながら丁寧に名刺を渡してきた。

「神？ 神ってあれか？ この世の事は全て知っているとかが、人をおもちやか何かにはしか見ていないとか言うあの神か！？」

生憎、マンガやアニメの二次創作にも精通している俺としては神が間違えて殺しちゃった主人公をマンガやアニメの世界に転生させてチートにしてくれるというある種のテンプレ神は実際には無いと思っっている。否定的な訳ではない、現実的に考えてそんな簡単に転生なんて出来る訳が無いからだ。

「あゝ、キミそういう部類の人間か。まあ実際そういう神もいるよ、でも俺は人をおもちやと見ている訳ではないし、謝罪をしてチートにしてやるうとかいう君の考えている神でもない」

俺の心を読んでか、余計な補足説明をしながら自称神は話を続けた。

5

「俺は所謂研究者の部類に入る。人がどのような状況でどのようなことを考え、どのような選択をするか。誕生を起点として死を終点とする人の生にはどの位の法則性を持ち、特異性を持つか。なんていう研究をしている奴も居る。・・・自称じゃねーよ、自称じゃ」
心のツツコミにも答えつつ、俺に説明する神。無駄に細かいのかもしれない。

「ふーん、で。アンタは何の研究をしているわけ？」

興味は無いが俺がここに居る理由を知りたいため、情報を得ようとした。

「俺の研究は少々特殊でな、人と人の関わり合いについてだ。」

人と人との関わり合い？ どういう事だ？

「人は関わり合いを求める種族だって言うのは、お前さん自身今まで生きていて何度も経験したことがあるだろう。話をする、手を握る、同じ行動を取る、誰かを助ける等、その行動は五万とある」

確かに、ダチとつるむ時だって同じ行動を取ることがある。馬鹿やったり、熱く語り合ったりといった事をやった事もあるしな。

「そして、その一つ一つの行動で人の生とは終着点が異なる。所がだ、これは実際に生きている人に当たるものであり、創作物に当たるものではないということは判るだろうか？」

創作物？ アニゲー関連しか知らんが、確かにそうだな。態々半生を描くことなんて無いだろうし。

「一つは物語としての強制力という物だ。創作物の作者の世界は既に一定のことが定められていて、それを破る行為は決して起こらない。また例え定義を破る行動を起こしても、そのしわ寄せが予定外のところで出てきて結果を修正しようとする・・・」
とかなり長い時間、自称神の研究について熱く語られた。

「要するにだ、創作物に掛かる強制力を完全に無視した存在を置く事で創作物の登場人物にどの様に関わり変化を起こすことが出来るかという研究だ。」

「・・・で、俺はどっかの創作物の世界に転生して登場人物と関わり、創作物の結末を変えることが出来るかって事を実験する

んだろ」

大体予想が出来たが、あえて目的とか態々言うか？ 普通。

「勿論だ、共同実験者、今回の場合主要実験者となるキミに実験内容を伝えなければ、実験が成立しないからだよ。そして、キミが今回転生してもらおう主な世界は「魔法少女リリカルなのは」の世界だ」

なのはか、一応ゲームまでしつかりやっている俺だけだ。あとフェイトは俺の嫁兼妹。

「まあ、一度不慮とはいえ死んだ身だし、記憶持ちで転生して、二次元に入れるって考えれば楽しそうだから、やっても良いが何か能力とかは付かないのか？」

「やっぱり魔力ランクSSSとか御神流継承者とかレアスキル持ちとか有ったら面白いじゃんか。」

「パンツ見て、不慮の死とかほざいてられる精神は大した物だが、そんなスキルは今回の実験には邪魔になる恐れがあるから控えて貰うぞ。」

なん…だと?!?!?

「おい、魔法がある世界に行くのに魔法が使えないってヤバ過ぎだろ」

ただでさえ、管理局の上の奴等が真つ黒なのに改変とか出来んのか？

そう考えていると自称神は鼻で笑いながら言い放つ。

「最初に言ったが、人と人との関わりが今回の実験の肝だ。素質として魔力がSSSになったり、身体能力も人類の限界値まであげる事は可能では有るが、結局は努力をしなければ一般人。弛まぬ研鑽を続ければ、一流になるだろう。」

一応、いける事は行けんのかよ。それはそれで十分チートな気がするけどな。

「後は、レアスキルでは無いが女縁はかなり期待して良いぞ。特に主要キャラにはドンドン関われ。ハーレムなんて原作崩壊は研究に大きく進展を見せられるから、身体が保つまでやってみな」

とまあ、完全に遊んでいるような感じで言い放ちやがった。

「…了解。努力してモテモテになってストーリーに介入しろって事で良いわけだな」

これが本当のギャルゲーってか？ そういつて立ち上がると、自称神の横に扉が現れる。ここから転生するって感じかな。

「そうだ、お前の力を分かりやすく伝えるために意識下でパラメータがチェック出来るような事にはしてるから色々と参考に見てみるが良い。それじゃ実験開始だ」

自称神はそう言うと、持っていたスイッチを押した。

ぱかっ！

扉の前に立つ俺の真下に穴が開いた。

「……………はぁ？」

思ったのが遅いのか、動いたのが遅いのか、俺は穴に何の抵抗もなく落ちた。

「うおおおおおいいい!?!?!?!?!」

「ふむ、『テンプレートから急に外れた場合の人間の心理状況、行動』の実験だったが……あまり良いリアクションは取れなかった様だ」

小さくなる自称神の姿を目にして俺は『リリカルなのは』の世界に転生した。

第1話 転生理由、実験目的（後書き）

第1話でした。

次回から原作世界へ転生予定。

第2話 現状確認（前書き）

第2話公開

ストツクなんて無かったんや。。。。

文章上、おかしな点があったら、報告よろしくお願いします。

第2話 現状確認

目覚めた時は朧げで、目に入るのは眩い光。
周りからは暖かな歓喜の声が聞こえてくる。

「あなた！ この子が私達の子よ！」

「ああ！ よく頑張ったぞ、ルミ！」

どうやら目の前にいる男女が俺の両親らしい。まだ目が見えないが、優しい人だと良いな。

・
・
・
・
・

こんにちわ、時枝楓改めカエデ＝フォーレットです。

僕は現在5歳の少年やってます。

一人称が変わってるって？・・・精神は肉体に引っ張られるとか物語の話だと思っていた頃もありました。

子どもだから当たり前だが、子ども扱いされると肉体が喜んでしまふという何とも言えない精神がそう何年も続く筈がなく、今ではこの有様である。

そんな訳だが、未だに原作の知識や前世の知識なんかは覚えていたりはしてる。原作突入するまでは覚えておきたい物だ。

5年間の記憶は是非とも無かった事にして頂きたい。アレは精神が

大人だとマジで無理だ。
赤ちゃんプレイとかしたい奴なら良さそうだが、僕にはそんな性癖は断じて無い。。。と思う。

さて、僕の今いる世界は第67管理世界「アイスピメント」一年中亜寒帯気候が広がる世界で文化レベルはC・・・漁業と酪農がこの世界の主要産業である。

別に此処で僕が生まれた訳でもないし、此処で育った訳でもない。父であるアルト＝フォーレットの仕事の出張の為である。

魔法地質調査、これが管理局員としての父の仕事だ。

管理世界における魔力素の成分や含有率、消耗率を地質から調査する事で、大型魔力駆動炉の建設の必要性を管理世界の政府や管理局に説明することらしい。

そこに短期の出張という事で、旅行がてら僕が付いてきたわけだ。

今は小さな街の貸アパートで留守番中・・・

「父さん、遅いな。夕食は一応用意出来たのに・・・」

僕は胚芽パンと羊乳のシチューを作って父さんの帰りを待っていた。料理は母さんから学び、食べられる程度の実力まで上がった。

何でも、知識や技術、能力は経験すればする程向上できるらしい。前世では苦手だった外国語、こっちは基本はミッド語だが、難なく覚えられたのが良い例だ。

魔力量は現段階だとD、原作まであと4年。それなりに戦える様にしなきゃ、実験に支障が出るかもしれない。

そんなこんなで、冷めたシチューを温めていた。そこに・・・

「ドカーン!!!!」

爆音と強烈な白い光が街を覆った。

第2話 現状確認（後書き）

作者「というわけで、始まりましたね」

カエデ「そうだな。……ってなんだよこの空間!？」

作者「いやあ、こういう小説にお決まりの何でもあり空間ですよ。こういうのやってみたかつたんですよ」

カエデ「なるほど、まあある種のテンプレ感はあるけど」

作者「此処では、いわゆる読んでくれた読者さんのメールの紹介や質問に答えたり、キャラを知って頂くための雑談ブースって感じになっています」

カエデ「ふうん、……で肝心のメールってというのは？」

作者「無い」

カエデ「まあ、まだ1話投稿してから1日経ってないし仕方が無いか」

作者「そういう事。という事で、また次回 ノシ」

カエデ「っ！ ちょっと待て！ その前に聞きたい事がある。いつになったら海鳴に行くんだ？」

作者「出来れば次回には地球に行きたいな。まあ実際は……」

カエデ「作者の腕次第って事か。さっさと更新しろよな」

作者「出来ればやってるが、生憎スマホで打つと結構遅くてな。毎日更新が今の所の目標だ」

カエデ「三日坊主じゃないことを祈るぜ」

作者「それでは」

カエデ「また次回で」

二人「バイバイ」 ノシ

カエデ「つかこの更新（第2話）を明日の夜やれば良かったじゃないか。。。」「

あっ！。。。。

第3話 死別、そして・・・（前書き）

間に合わな・・・かった。。。（ガクリ）

文章上、おかしな点があったら、報告よろしくお願いします。

1 / 5 あとがき修正

第3話

死別、そして・・・

人の悲鳴。

子どもの泣き声。

爆発音。

建物が崩壊する音。

炎が木々を焼き落とす音。

爆音と共に襲った衝撃波は、5歳の身体を軽く吹き飛ばし、窓とは反対側の壁に頭を強打した僕が意識を失う瞬間まで聞いていた音は静かな街が阿鼻叫喚に包まれる音であった。

(おいおい、こんな所で俺は死ぬのか？ 話が違っじゃな・・・い
・・・か・・・)

(・・・ようぶか！！ カエ・・・ぜった・・・
・・・から・・・)

意識の外、聞こえるか聞こえないか分からない所で、誰かが叫んで
いる気がした。

「・・・知らない・・・天井だ・・・」

目が覚めて、最初に見たのは清潔感のある白い天井。鼻に香るは消
毒液の匂い。聞こえる音は医療用語が交差する喧騒。背中に感じる

は少し固めのベッド。そして左手に感じる温かさは……………

「母さん……………」

母さんである、ルミ＝フォーレットの暖かい両手の感触であった。

疲れているのか、母さんは眠っていた。

薄い化粧が少し落ちて普段は目立たない目の下の隈が母さんの白い顔から浮き出る様に目立っている。

母さんは管理局の戦技教導官であり、原作のなのはの将来の先輩に当たる立場である。

毎日遅くまで訓練のスケジュールを組み立てて休日くらいしかゆっくり休めない筈なのに僕に料理や魔法を教えてくれる太陽のような人だ。

そんな母さんだが、ミッドにいるはずなのにどうして僕の左手を握っているのだろうか？

「……………カエちゃん？」

左手の指が動いた事に気が付いたのか、母さんは目を開いて僕の顔

母さんの泣き顔を初めて見た。

僕が気絶した時、街で違法魔導師がテロを起こしたらしい。街にある魔力駆動炉を強奪しようとしたが、現地の管理局員との交戦となり街は半壊したらしい。

父さんは僕の待つ家に戻り、気絶した僕をアパートの大家に託し戦線へ向かい・・・・・・・・

帰らぬ人となった。

母さんはテロ事件を聞きつけ転送ポートからアイスピメントに駆けつけたそうだ。

気を失い、こうやって目覚めるまで4日経過し地味に僕自身生死の境を彷徨ったらしい。

父さんと僕を一度に失いかけ、母さんはショックで眠る事が出来ず、容態が安定した昨日の夜にようやく眠る事が出来たそうだ。

「ねえ、カエちゃん。。。これからどうしたい？」

涙を拭った母さんは椅子に座り直し真剣な顔で僕に聞いてきた。

「どうしたいって、言われてもどういふ事が判らないよ」

前世でも身内の死を見る事が無かった僕は少なからずパニックにはなっていた為か母さんの言葉の意図が読めなかった。

「うーん…………カエちゃんは、お母さんと一緒に居たい？」
目を細めて話しかける母さん。それはまるで泣きそうな僕をあやすような声であった。

一緒に居る。

なんの変哲もない言葉だが、その言葉を聞いた後に残るものは…………
…………一人という孤独。

その答えに辿り着いた途端、僕の目からふと、水が零れた。

「僕、お母さんと一緒に居たいよ……」

精神すら幼くなってしまうた僕はただただ母さんと一緒に居たいという言葉だけが吐露していた。

「昔行つた、お母さんのおじいちゃんの故郷つて覚えてる？」

母さんは嗚咽している僕の背中を優しく撫でながら昔の旅行の話をした。

母さんのおじいちゃんの故郷………忘れるわけが無い、むしろ忘れる事が出来ない。

第97管理外世界 現地世界名『地球』

魔法技術は全く無いがとても過ごしやすい世界であった。

僕のひいおじいちゃんはこの地球出身で、放浪の旅に出ているら偶々ミッドにいたらしい、

「そこでね母さん、………管理局の局員を休養して、カエちやんとちゃんと親子やろつと思つたの」

母さんはさっきの涙目な母さんとは正反対なキラキラした目で言い放った。

「さーて、そうと決めればさっさと引越すよ！ カエちゃん！」

退院して3日後。

「ルミ先輩、必ず帰ってきてくださいよ」

次元航空艦から母さんの部下だった人が話す。

「自分の気持ちに整理がいたら……………ね」

僕達親子は地球……海鳴に降り立った。

第3話 死別、そして・・・（後書き）

作者「・・・・・・・・」

カエデ「・・・・・・・・」

作者「・・・・・・・・」

カエデ「・・・・・・・・なあ？」

作者「（ビクッ！）・・・なに？」

カエデ「昨日の決意はどうした？」

作者「ご、ごめんなさい。マジで書く時間が22時過ぎからしか無かったもので」

カエデ「三日坊主にもなってねーじゃないかよ！！ このアホ作者！・・・！」

（カエデ説教中・・・）

作者「・・・という事で今回も読んで頂きありがとうございます！！
（足が正座で痺れている）」

カエデ「今回は全体がシリアルというか切ない話だったな」

作者「シリアルじゃねーよ！！（ピクッ） シリアスだよ！！（ピクピクっ！！）」

カエデ「それに名前しか出てない親父が何時の間にかに死んでるし」

作者「コレは後々のフラグでもあるのさ」

カエデ「物語の進行の為に殺したのか、作者ー！！！」

作者「何をいう、これはカエデが主人公の物語だ。という事はカエデ！ お前が殺したようなものだ！！」（ドヤあ・・・）

カエデ「なん！？・・・って言う訳ねえだろ！！！」（右ストレートを放つ）

作者「ぶべらっ！？」

・・・ここから質問コーナー・・・

Q・努力してる時点で、チートじゃないじゃん！ どういう事なの？

作者「書いて早々質問来るとは思わなかった」

カエデ「流石なのは枠、検索のし易さも合っちゃって二日で1000PV目前とは・・・」

作者「読んでくれる人がいる限り、頑張りますよ！」

カエデ「で、今回の質問だが、確かに努力とチートって正反対の言葉だよな」

作者「まあ所謂チート系主人公って奴は本編でも言うとおり、魔力

が初期から最大値とか、魔法に代わる誰にも負けない能力やレアスキルの保持とかが一般的だよね」

カエデ「確かに、でも自称神はくれなかつたぞ」

作者「この物語のというか、カエデくんのチートって言うのは所謂リアルチートって存在なんだよ」

カエデ「リアルチート？　ってあれか？　イチローとか、パウプロの完成したサクセス選手みたいな奴か？」

作者「うん、まあ後者は何とも言えないが、メジャーリーガーのイチロー選手って高校時代から怪物とか天才とか言われて居たけど、実際は才能に胡座を掻いてた訳ではなく、日々の努力。食生活から練習の一つ一つまでに気に掛けることで10年以上メジャーでスタメンを維持出来るんだと思います」

カエデ「確かに、超一流を保つためには、日々の努力が必要なのかもしれないな」

作者「それにカエデには努力をしなければ一般人と同等しか出来ないと神は言っていました、逆に言えば努力しなくても一般人レベルは確実に能力を持っている、それ以下にはならない。と考えればそれだけでも充分チートと呼べると思う」

カエデ「まあ、何をやっても人並みに出来るって言われると充分チートって言えるかもしれないな」

作者「という事で、今回の質問の解答はコチラ！」

A・ 傍から見ればチート、でも陰ではしっかりと努力しているんです。

・・・質問コーナーここまで・・・

作者「さて、次回はいよいよ舞台を海鳴に移します」

カエデ「かなり長かったな」

作者「確かに、今まで原作のげの字も出ていなかったしな」

カエデ「原作のキャラだつて一人も出てないし」

作者「いや、一応ほんのちょっとは原作に関わるキャラは出したよ」

カエデ「ええ！？ どどこどこ？？（作品を読み直す）」

作者「まあ、描写はほぼ0だしヒントとしても時系列的に考えるしか無いけどね」

カエデ「クッソー、わかんね〜」

作者「番外編を出せたら、そんな時に説明出来るんじゃないかと思っているから、
気長に待っててね」

カエデ「ご意見、ご感想、ご質問をお待ちしています ノシ」

作者「今回は遂にあの白い悪魔が登場!!」

ノシ」

カエデ「それでは」

二人「また次回!!」

「??.?.」にゃはは、悪魔って一体全体どういう事かな?」

第4話 海鳴での出会い（前書き）

海鳴突入。

オリジナル設定？ なにそれ美味しいの？

文章上、おかしな点があったら、報告よろしくお願いします。

第4話 海鳴での出会い

海鳴・・・

海に面している街とそれを覆うように囲む山々が共存している場所。

原作の主要となる場所。

「んーっ！ 潮の香りが良いわね」

母さんはその場で伸びをして、そう言った。

今いるのは海鳴海浜公園、名シーンの舞台というやつだ。

此処でなのはとフェイトが友達になって、リボンを交換する・・・
・聖地巡礼というわけじゃないが、何とも言えない感動があるな。

「さて、カエちゃん。今日からこの街で住むけど気に入るかな」

何か思う所があったように僕が黙っていたからだろうか、母さんはそんな事を聞いてくる。

「うん、自然も一杯で気持ちいいよ」

前の旅行の時には主に高地を中心に回っていたため海付近は来なかったしな。

「そっか、それじゃあ家に向かうよ」

そう言っただけで母さんは僕の手を取りゆっくりと歩き始めた。

どうしてこうなった。

「あら、お隣さんですか？ 私ルミ＝F＝川端と申します。この辺りで動物病院をやっている、榎原のはとこで此方のお家に今度越してきましたので、これからよろしくお願いします」

むしろ、どうして気付かなかった。

「あら、ご丁寧に。高町桃子です。愛ちゃんには親族は居ないと聞いてましたけど・・・」

ひいじいちゃんの苗字が槇原ってことを・・・

「祖父は単身海外に渡り、冒険をしていた人で、縁はその時に絶たれてしまったらしいんですけど、数年前に兄の息子が死んだと聞いて単身此方に戻ってきたんですよ。その時丁度私も付いてきて知り合っただって所ですね」

確かに、丘の上に立つ寮に挨拶に行った事は覚えている。

「それはまた、破天荒なお方だったんですね。・・・失礼ですがその子は弟さんかしら？」

だがしかし・・・

「この子は私の息子です。カエちゃん、挨拶してみなさい？」

どうして高町家の隣がウチなんだ!???

「僕、カエデです。5歳です」

「あら、ウチの子と同じ年だったのね。なのはっていう女の子だけど、これから仲良くしてくれるかしら？　カエデ君？」

三時間後……………

『ピンポン』

大方、引っ越しが終わって一息ついた時、インターホンが鳴った。

「お隣さんが来たみたいね。カエちゃんも男の子なんだから、しっかりとお話しなさいね」

僕の背を押しながら、母さんと共に玄関へ向かう。

(ガチャ)「お待ちしていました、どうぞお入りください」

ドアを開いた先には……

桃子さんの背後に隠れようとしてつつ此方を気にする一人の少女がいた。

「……高町……なのは、なの」

後ろ髪を二つに分けて結んだ所謂ツインテール。

遣伝なのか、桃子さんと同じ色の髪が揺れ動いている。

小さすぎて聞こえないんじゃないかと思う位の声だった。

「か、……カエデ……フォーレットです。よろしくね、なのは
ちゃん」

そう言って、僕はなのはちゃんに握手の手を延ばした。

これが、僕となのはの出会いであった。

第4話 海鳴での出会い（後書き）

作者「という事で、第4話でした」

カエデ「またトンデモ設定持ってきたがって」

作者「最初、石田先生のはどこにするか迷った」

カエデ「それにしても設定としたら、とらハ2の終了後なのか」

作者「ああ本作品でわな、ついでに作者はとらハ未プレイで知識としてはwikiと他の作者さんの作品内に出てくる程度しかない」

カエデ「という事はその辺の時間軸はバラバラ？」

作者「そうだね、でも4話終了時には土郎さんは退院している事になって居るから、安心は出来るよ」

カエデ「なるほどね。にしてもちっちゃなのはカワユス）（

作者「あんな天使が悪魔や魔王と呼ばれる未来なんて、この頃には想像なんてできるもんじゃないからな」

カエデ「たしかにな、しかし今回は質問は無いか」

作者「前回は特別に来たぐらいだな」

カエデ「さて、この後はどうなるんだ」

作者「3年位飛ばしてみようと思う」

カエデ「原作一步前ってことが、それではまた次回ノシ」

作者「ご意見、ご感想を楽しみにしています。 ノシ

第5話

そして3年の月日が経ち（前書き）

原作直前まで来たよ。

3000PV突破！！ ありがとうございます。

ここまで沢山の人に読まれるとは思いませんでした！！

これからも頑張りたいと思います！！

文章上、おかしな点があったら、報告よろしく願いします。

第5話

そして3年の月日が経ち

「なのはー！！ 迎えに来たぞー」

なのはとの出会いから3年と少し、小学3年生になったカエデっフオーレット＝川端です。

え？ なんで3年も飛ばしたかって？

小学校に入るまでは、大体毎日一緒に遊んでいたし、1、2年の時は同じクラスにはなれなかった。

「待って〜、カエデくん！」

玄関ドアを開き、いつものツインテールを跳ねさせて急いで僕の方へ来るのは。

出会った当初は土郎さんの怪我で一人ぼっちが多かったせいとか、声

も小さくいつもおどおどしていた。

それでも僕にとって初めての同年代の友達だった為か、なのはにばつか声を掛けて居ると、次第に本来持っていた明るさを取り戻していた。

原作のイベントだが、アリサとの喧嘩も制服をボロボロにする位のレベルまで達していて、すずかは兎も角周りの子ども達も泣いてしまっ程であった事は二年近く経ったものの今でも私立聖祥学園付属小学校の伝説になっている。

「カエデ君、今日もなのはをよろしくね」

そう言って、ニコニコ微笑む桃子さん。

確か、原作開始時の年齢が………凄く黒い殺気を感じたためこれ以上は考えるのを止そう。

どう考えても母さんと同年齢にしか見えない、これが高町家固有のレアスキルなのか!?

「お母さん、なのはしっかりしてるもん！ カエデ君行こうなの
！！」

「ちよっ！？ 待つてなのは！！ そんなに引つ張らないで！
！ あ、いつてきます、桃子さん」

少し恥ずかしかつたのだろう、なのはは僕の手を強引に引つ張り学
校に向かう。

流石は聖祥の白きぼ……一瞬、なのはの僕を掴んでいる左
手に今まで以上の力が込められた気がする。
この察知能力も高町家固有のレアスキルなのだろうか？

「あらあらなのはったら、いつてらっしやい。……ふふ

そんな状況を笑顔で見送る桃子さんであった。

side なのは

私、高町なのは。私立聖祥学園付属小学校に通う小学3年生です。

隣にいるのは私の一番の友達のカエデ＝フォーレット＝川端、カエデくんなの。

髪はよく見ないと判らない程度に青み掛かった黒、少し伸ばしたくせ毛の無いストレートヘア、身長は130cm位となのはと同じか少し小さい位。お母さんのルミさんに似ているのか小顔でパーツが整っていて美形、夕陽の様な瞳は垂れ目も相まって穏やかな印象を受け取れるの。

「今日から3年生だけど、なのはは勉強大丈夫か？」

「う、うん。多分大丈夫なの。」

勉強もアリサちゃんと同じ位出来るし、運動もなのはよりも全然出来る。

「そつえば、今年是一緒のクラスになれると良いね」

「そうだな、でもアリサとかが五月蠅そうだな。アレ勝負、コレ勝負って」

「にははは、確かにそうかもしれないの」

小学校に入る前から仲良しさんだったけど、1、2年は一緒のクラスになれなくて、家で落ち込んだりしちゃった。

アリサちゃんとすずかちゃんを紹介してからはよく4人で遊ぶようになったけど、バスまでの道のりのこの時間は私とカエデくんの二人だけの空間なの。

ブロロロロロ……

時間通りに登校バスがやってくる。

私とカエデ君がバスに乗り込むと・・・

「なのは！ カエデ！ おはよう！！」

元気な声で挨拶をしてくるアリサ「バニングス、アリサちゃんと。

「なのはちゃん、カエデ君、おはよう！」

清涼感のある声で挨拶をしてくる月村すずか、すずかちゃんが手を振って待っていた。

「おはよう！ アリサちゃん！ すずかちゃん！」

「おはよう、アリサ、すずか」

私とカエデ君は一緒に返事をした。

「さてと、なのは準備は良いわね？ 新学期一発目、絶対勝つわ

よー」

「私も負けないからね」

「絶対に負けないの!」

side カエデ

「ふふ、あそこでパーを出したのは五手後のグーのフラグだったのよ」

「ごめんね、なのはちゃん」

「うー、どうしてあそこでチヨキ出しちゃったんだろっ・・・」

現状を説明するとだな。

席順を決める為にじゃんけん 俺は参加不可 アリサとすずかの作戦勝ち なのはがいじける。

といった所だ。因みに席順はアリサ―僕―すずか―なのは の順になった。

「そつえば、クラス替えどうなるかな？」

落ち込んでるなのは少し見るに耐えなくなったため、話を変えようとした。

「今年も僕だけ一人クラスが違ったりな」

「それは、絶対阻止するわ！（よ！（なの！）」

と息のあった答えが帰ってきた。

ついでに両側の二人が寄って来た。

同時にバスの前方から男共の殺気も感じてきた。

僕にどうしろっていうんだ。

第5話

そして3年の月日が経ち（後書き）

作者「もげろ」

カエデ「オイマテ作者」

作者「何だ主人公、今小坊の癖にリア充滿喫しているどっかの奴に鉄槌を下そうと思っっているんだから、後にしてくれ」

カエデ「それは俺のせいじゃない！！ それに明らかにアリサとすずかに好かれてるけど、いつの間に建設したんだ！？」

作者「それはきつとガールズトーク回に話されると思われ」

カエデ「ガールズトークとかwww、この作者に出来るとは思えない」

作者「妄想は経験を凌駕する！！ っっていうか、今回初めてカエデの容姿に関する描写が出てきたね」

カエデ「むしろ今まで一言も出てなかった事に驚きだ。作者が普通に忘れていたんだと思っっていた」

作者「むしろ、逆だな。今までイメージをつけない事で、読者に想像してもらっていたけど、俺も想像じゃ最後まで書き切る自信が無かった事と、今回もう一つ新しい試みで主人公以外の視点からの描

写を入れる事で、カエデの外見を大雑把に固定して、想像しやすくしたってのが主な理由かな」

カエデ「作者から長い且つそれなりに説得力の有る発言が飛び出るとは思わなかった」

作者「うっさい、・・・それにしても意見や感想来ないな」

カエデ「脱字の報告が無いと考えれば、正確な文章を書けていると評価されるのだと思うがな」

作者「コメント欲しいけど、アンケートとかする程話数も経ってないしな」

カエデ「まあ、それは弛まぬ努力が必要だな。書いて書いて書きまくれや」

作者「それがやっぱり確かか。て事で、次回予告、カエデこれ読んで（カンペを渡す）」

カエデ「ちょ、おい！　　たく。『無事小学3年になったカエデ。しかし、それは大いなる意思が働く序章に過ぎなかったのだ！　次回、魔法少女リリカルなのは　次元を超えし転生者　第6話　はじまりの始まり　　次回も、リリカルマジ狩る頑張ります　！！　　てへっ　　』　　.....　　」

作者「おお、そこまで読んでくれるとは流石主人公！！　　例え少年でも、てへっ　　はキモイなwww　　」

カエデ「・・・Am I kill you?」

作者「は？」

カエデ「199!!」

作者「ぐへっ!!」

そして作者の倒れた近くに血文字が発見された。

『また、次回。ノシ』

第6話

はじまりの始まり(前書き)

スマホで書いてたら、途中で誤って戻るボタンを押して書き直し。テンション下がるわ。

PV・・・昨日は3000突破とか言っていました、
今現在(8日0時現在)、PV5932・・・
週末の魔力半端無いな。

文章上、おかしな点があったら、報告よろしく願います。

第6話

はじまりの始まり

バスが小学校へ着き、僕たちはクラス替えの掲示を見た。

「やった〜！」

カエデ君と一緒にクラスになれたよ!!！」

まるで大学受験に合格したかの様に喜ぶのは。

「一緒にクラスになったからには、中間、期末以外も色々な勝負をするから覚悟しなさいよ! カエデ!!！」

正に『ビシッ!!』』というSEが聞こえそうな位に此方に指をさしてくるアリサ。

「良かった、今年はみんなと一緒にクラスになれたね」

僕とというか、皆と一緒にのクラスになれたことを喜ぶすずか。

そんな喜ぶ三人娘を横に僕は掲示のある一点を見つめていた。

「別々のクラスになっちまったか・・・」

三人に聞こえない様に呟いた声、その声が届いたのは恐らく僕だけだろう。

僕の視線の先、掲示に記される一人の名前。

それはなのは、アリサ、すずか、そしてここには居ないもう一人の少女と最大の友となる者の名。

『八神 はやて』

そう記されていた。

始業式も滞りなく終わり、今はなのはの実家の喫茶店である『翠屋』に来ていた。

翠屋は店主の土郎さんの淹れるコーヒーと、パティシエである桃子さんが作る洋菓子が人気の喫茶店で、お昼時にサンドイッチなどの軽食も置いてある海鳴の人気店の一つである。

僕たちはケーキにジュース、そして小学生らしい会話が……

「全く、最近の授業指導要領は意味が判らないわよ!!」

「そうだよ、毎年改訂改訂って言われても何処を変えたのか明確じゃない部分もあるし」

「以前、円周率が3になった時だって、結局1年で戻したりしていたし、何がしたいんだって言われても仕方ないと思うよ」

57

「とにかく！ 現状を知っているのは、私たち子どもたちだし、ゆとり世代って言われてもそのゆとりを作ったのは、大人なのよ！
結局、私たち子どもは世の中の被害者でしか無いのよ！」

……訂正。大人より大人の会話してるわ。
まあそんな会話についていってる俺は前世の知識があるからだけど、
大学でもこんな会話したことないぞ。

「じゃ……じゃは……」

あ、なのはがショートしてる。

「あはは、なんか小学生らしくない会話が聞こえたけど……なのはは止まってるし」

そんな会話をしていると薄暗い茶色の長い髪を三つ編みに纏めた眼鏡のウエイトレスさんがやってきた。

「あ、お姉ちゃん、おかえりなさいなの」

「美由希さん、おじやましています」

「お邪魔しています」

「邪魔はしてないよ、美由希さん」

なのは意識を取り戻し、それぞれ挨拶した。誰がどれかって言わずとも分かるだろう。

彼女は高町 美由希。なのはの姉であり、ここ翠屋でウェイトレスとしてアルバイトしている。

「いらつしゃい、アリサちゃん、すずかちゃん。カエデ君、恭ちゃんが後で道場に来て言ってたよ」

「なん・・・だと!？」

美由希さんの連絡に驚愕し、お決まりの言葉しか出なかった。

「練習試合か・・・それとも乱打ちか・・・むしろ帰国したからって色んな意味でのストレス発散か？ どれにしても、碌な事にならなさそうだ」

「お姉ちゃんと恭也さん、もう家まで着いたんだ。ノエルさんもフアリンも今頃夕食の準備かな」

僕がブツブツ言ってる横ですすがが呟いてた。

「あのさ、カエデ……………」

「（ブツブツ）……………ん？　ああ、どうしたアリサ？」

僕がこの後の死合（誤字にあらず）の戦略を考えているとアリサがこっちを見てきた。

「この後、道場での練習見に行ってもいいかしら？　カエデの練習姿ってあんまり見たことないし」

僕の練習姿か、確かに学校じゃ剣道なんかやらないし、本気とか出したら色々騒がれるしな。

「別にいいよ、なのはとすずかも来るか？」

「うん、行くよ！　カエデ君の剣道着姿、カッコいいしね！」

「じゃあ、お言葉に甘えて……………」

二人は即答した。

あ、遅くなるかもしれないから母さんに夕食作って貰わなきゃ。

「あ、母さん。今日ちょっと遅くなるかもしれないから夕食作っておいてくれない?」

そう言って別のテーブルの後片付けをしている、母さんに声を掛けた。

「じゃあ、今日は進級記念って事でカエちゃん好きな物を一品、多めに作っちゃうからね」

そう、母さんはこっちに来てからお隣さんってことで、翠屋で働くことになっていた。今じゃサブチーフマネージャーまでになっている。

チーフマネージャーの人は、今海外に留学に行っているらしい、名前は聞き忘れたけど明るい茶髪の似合う歌の上手いお姉さんだったな。

「ありがとう、母さん。それじゃあみんなそろそろ行くよ」

そう言って僕となのは達は、翠屋を出てなのは家の隣にある道場
に向かうことになった。

第6話

はじまりの始まり（後書き）

作者「今回は長かった気がする」

カエデ「それは書き直したからじゃないか？」

作者「……………かもしれない」

カエデ「それにしても今回新キャラ多かった気がするな」

作者「名前だけの人から、風貌だけの人もいたな。全員知っている人は、かなりのなのは通だな」

カエデ「最後の人なんて、なのは関係無いじゃないか」

作者「いやまあ、翠屋を舞台で考えると作中に出ないとしても、こういう表現でも出た方がとら八からこのシリーズのファンの人にも読んでもらいたいと思ってね」

カエデ「でも、知ってるのはwiki情報だけなんだろう？」

作者「だが、作品に深みが出るじゃないか」

カエデ「お前がそう思うなら、まあ良いけどな。適当に出してファンに反感買わない様に頑張れ」

作者「ぐぬぬ。善処するぜ」

カエデ「にしても、次回は戦闘か」

作者「ああ、この作品初の戦闘シーンになるな」

カエデ「……………書けるの？」

作者「……自信は無いが、頑張る」

カエデ「それでは！」

作者「また次回！」

二人「じゃあね〜 ノシ」

第7話

剣士時々シスコン

前編（前書き）

戦闘回です。

長めになったので、二分割。

の割には戦闘描写少ない。

つか、文章が少ない。

文章上、おかしな点があったら、報告よろしくお願いします。

第7話

剣士時々スコン

前編

ガラガラガラ！！

僕が道場の引き戸を開けると、そこには一人の黒髪の青年、なのはの兄である高町恭也、恭也さんの姿があった。

「お久しぶりです、恭也さん」

「久しぶりだな、カエデ。訓練は続けていただろうな？」

恭也さんは藍色の道着を着て最奥に座っており、挨拶をすると立ち上がり、此方に向かってきた。

「勿論ですよ、自主練も欠かしてませんし、御神流の技の練習だつて、土郎さんや美由希さんに教えてもらってますし、簡単にはやられませんかよ」

既に僕も道着を着て、木刀の準備をしながら恭也さんに言い返した。

御神流・・・正式名称は教えてくれなかったが、御神真刀流・小太刀二刀術とか言うらしい。

剣術と言う事で、剣道とは異なり人を殺める為の術である。

元々、士郎さんは御神流を使って要人警護・・・ボディーガードの仕事をしていたらしい。

しかしテロに遭って大怪我をして引退し今は翠屋のオーナーと継承者作りに勤しんでいる。

僕が御神流を学んでいる理由は二つ。

一つは表向きで、昔僕もテロに遭い父さんを亡くした事から、周りの友や身近な家族を守りたいという点で強くなりたいと思ったため。

士郎さんには、こう言って門下生として受け入れさせてもらった。

もう一つの裏の理由。それはこれからの原作の進行に向けて全体の底上げがしなかったからだ。

勿論魔法の訓練も母さんに頼んで行っている。流石元戦技教導官、魔力運用法や僕の素質に合った魔力増幅練習、魔力弾の制御などを教わっている。

まあ魔法関連はこの場では置いておこう。

「で、今日の鍛錬内容はどうするんですか？」

「乱打ち5分の10セット。その後は練習試合を3本。と言ったところかな」

「分かりました。・・・さてと、なのは達は脇で見てください」

予想通りしんどい鍛錬内容だ。後ろに続いて入ってくるのは達を道場の隅に誘導していった。

「お兄ちゃん、おかえりなの」

「ただいま、なのは。なのはが道場に来るなんて珍しいじゃないか」

「うん、カエデ君の練習を見てみたいなって思って来ちゃったの。駄目だった？お兄ちゃん？」

「うっ、いやダメじゃないぞ。すずかちゃんやアリサちゃんもそっちで見てください」

今のやり取りで気づく人は居るだろうが、恭也さんは重度のシスコんだ。しかもなのは限定のである。

同じ妹の美由希さんには厳しく、兄弟子といった感じだからなのだろうか。

「さて、カエデ。そろそろ始めるぞ」

なのはとの会話を終え、再び此方を向く恭也さん。何処となくさつきとは違う覇気が感じられるのは、妹の目の前で良い所を見せたいからだろうか。

「よろしくお願いします」

呼吸を整えて僕は恭也さんから間合いを取った。
小太刀を模した2本の木刀を逆手に持ち集中力を高める。

僕と恭也さんの間になんとも言えない間が広がる。

「先手はカエデからだ、一発叩き込んでみる」

恭也さんは先手を譲ってくれるようだ。お言葉に甘えてと行きたいが、半端な攻撃だと返されて一発で終わってしまう。

「ハッ！！」

息を吐いて低く恭也さんに突っ込む、そして顎を狙って左手を切り上げる。

「くっ、少しは速くなったか、息を吐くタイミングと身体の力の入れ方はまだまだだが、ハッ！！」

恭也さんは難なく右の小太刀で止めて、左の小太刀で脇腹を狙ってくる。

カッ！！ シャーッ！！

狙ってきた小太刀を鈍角から受け流すように合わせて滑らせる。力じゃ勝てない現状では危険性の低い鍔迫り合いよりも、危険性が高いが相手の力を利用する合気のような戦い方が合っているという事だ。

日々は戦場、将来を見据えた練習も必要だが限られた状況下で機転を効かさなければ対象を守る事も、倒す事も出来ないのである。

右から左、左から右と受け流し、恭也さんが空けている場所に打ち込む、と言ってもワザと空けているので狙った所は防がれてしまっ
た。

狙いの基本は急所と呼ばれる場所だが、それは相手も理解している
ので避けられるか防がれる。

防がれる前に打つ。これを繰り返すのが乱打ちの練習になる。

「……よし、10本終了。10分の休憩後、練習試合をす
るぞー!」

「……分かりました。ありがとうございます」

つつ……かれたー！。恭也さん、少しでも隙を見つけたら強打してくるんだからな！。

「お疲れ様！ カエデくん！」

一息着こうと思ったら、なのはがタオルを持ってきてくれた。

「カエデ、なんであんなに動けるのよ？」

アリサは不服そうに言いながら、近づいてくる。

「恭也さんって凄い剣士だってお姉ちゃんが言ってたけど、こんなにぶつかり合いしてるんだ……」

すずかはスポーツドリンクを持ってきてくれた。

そうだな、アリサの疑問は勿論だろうから喋れる範囲で話そうか。

僕はすずかから貰ったスポーツドリンクを一口飲むと、口を開いた。

第7話

剣士時々スコン

前編（後書き）

作者「次回！ 遂にカエデの秘密が明らかに！？」

カエデ「と言っても、本編で語られている事が殆どだけだな」

作者「それにしても・・・」

カエデ「どうした？」

作者「明日から大学が始まる」

カエデ「明日って・・・祝日だろ？」

作者「ゼミは有るんだよ・・・成人の日関係無いから」

カエデ「・・・マジか」

作者「ほっといっていた卒論書がなくてわ」

カエデ「おい、何をほっといてんだよ」

作者「発表の準備もしなきゃ・・・」

カエデ「やる事一杯だな」

作者「そうだよ、だから明日は更新がさらに遅くなるかも・・・」

カエデ「遅くなるのは仕方ないが更新はしろよ？」

作者「……………うん」

カエデ「その物凄く長い間は何とも言えないが、頑張れよ」

作者「さて、今回はシスコン兄ちゃんとの対決だな」

カエデ「グッ……あれマジきついから。一度やってみ？
生に容赦無さすぎたって……」
小学

作者「さて、俺が明日書ける事を祈って、今日はここまで！
では
また次回まで！」

二人「ノシ」

第8話

剣士時々スロン

後編（前書き）

戦闘回後編です。

前編よりか長いと思う。

戦闘描写も多いかな。

にしても、接近戦は書きづらい。

文章上、おかしな点があったら、報告よろしくお願いします。

「僕が動ける理由、って言ってもそんな大層な理由はないよ。そもそも御神流を習い始めたのも3年ちよつと前からだからね」

俺はペットボトルの中身を半分にしてからアリサに答えた。

父さんがテロに遭って死んだこと・・・

自分の身も守れなかった事に腹が立ったこと・・・

母さんや自分の周りの人を守る力が欲しいと思ったこと・・・

「それからだよ朝は丘にある八束神社までランニングしたり、今の様に御神流の修行に参加させて貰ったり、筋トレ始めたりしたのはね」

「・・・・・・・・悪かったわね、お父さんのこと聞いてちゃって」

アリサは少しばつが悪そうな顔をした。しかし本当に小学3年生かっ
って思う気遣う発言できるもんだ。

「まあ、そこまで気にしている訳じゃないし、実際気を失っているうちに全部終わっちゃっていたから、怒りの矛先が分からないっていうのも有るのかな。ある一定の人物が憎いってことも無いからね。アリサが気に病むことはないよ」

そんなアリサの頭を撫でながら励ます僕。綺麗な金髪で撫でているこっちの方が気持ち良くなりそうである。

「っ！ / / / (カエデに撫でられて気持ちいかも・・・)」

撫でていると次第にアリサの顔が赤くなっていくのが判る。やっぱり同い年にしかも男友達に頭撫でられるっていうのは恥ずかしいのかな。

「む〜〜〜！！ アリサちゃんずるいよ！！ カエデ君にそんなに撫でて貰えるなんて！」

そんな事を考えているとさすがアリサに文句を言ってきた。さすがが文句を言うなんて珍しいな。

「カエデ君！ なのも頭撫でて欲しいの！」

そんなはずかは関係ないのか、なのはは僕に擦り寄って頭を撫でるとせがんできた。

「なんで、なのはも撫でなきゃいけないんだよ。つかなのははこの話、前に聞いただろ！」

実際弟子入りする時になのはも付き添いで来ていたから自主練云々以外は聞いていたはずだ。

「じゃあ、私は撫でてもらっても良いんだよね？」

そう言うてなのは同様擦り寄ってくるすずか。

「理由になってないよ！？」　　良いからすずかも離れて！！」

「むっ〜！！」

無理矢理引き剥がす事も出来ないの、口に出したが二人とも不満の様子だ。

アリサはこんなに恥ずかしがっているのに、どうしてやって欲しいんだろっ？

「よし、休憩は終わりだ」

恭也さんはそう言って手を叩くと乱打ちの時と同じ場所に立っていた。

その声に従い、立ち上がりなのは達に手を振った。

「じゃあ、頑張ってくるから」

「うん、頑張つてね！ カエデ君！」

「怪我には気をつけてね、カエデ君」

「頑張りなさいよね！」

とまあ三人娘の応援を受け、恭也さんの前に立った。

「・・・それじゃ練習試合をするぞ」

微妙に機嫌が悪そうな恭也さん。

あれか？ 最愛の妹が弟子にベタベタしてるのが気に食わないからか？

八つ当たりはやめて欲しいんだけど・・・

「ルールは前と同じですよね」

念押しでルールの確認をとってみる。

「ああ、頭、首、両手首、両足首のいずれかに打撃を与えれば、一本だ。片手、片足だけじゃ無効だからな。後武器が飛ばされたり無くなっても反則負けな」

「分かりました……」

やっぱり極悪ルールだよ。

片手、片足当たっても終わらないって事は逆に言えば、片方ばかり狙って精神的に追い詰める事も可能だ。

前に恭也さんと美由希さんの練習で美由希さんの手にグルグルとガムテープを巻いて離さない様にして一本取るまでってこのを見学していたら、丸一日経っていたって事も有ったし。

さて、どうするかな。

目を閉じて、静かに深呼吸をする。

精神を集中させる。コップ一杯の溢れんばかり入った水を零さない様に歪みの無い動きで近づく。

足音をさせず、急スピードで接近する。すかさず鳩尾に肘鉄を放つ。瞬間、恭也さんの重心が少し後ろに下がる事を予想して足を引っかけ、刀の射程まで持ち上げようとする。

「ハッ！！」 連続技としては良い線してるが、肘鉄も足狩りも力が足りない。それに武の達人となると重心をずらす事はほとんど無いぞ」

足を掛けるまでは問題無かったが、その足が上がらず、逆にバランスを奪われてしまった。

「技が通じなかった後の事も考えて動かないと、そこに隙が生まれる」

そう言って恭也さんは僕の道着を掴んで投げる。

バンツッ！！！！

投げられた僕は咄嗟に受け身を取ろうとした。しかし恭也さんは道着を離さない。

床に強烈に叩き込まれて、息が急に抜けた事で一瞬小太刀を握る両手から力が抜けてしまい、続く足払いで小太刀を手放してしまった。

「まず、一本だな」

恭也さんは一言いうと掴んでいた僕の道着を手離して元の位置に戻った。

離された僕は立ち上がり、道着の緩みを締めて道場の端に転がった小太刀を拾って、元の位置に戻る。

「次っ!!」

道場には恭也さんの指導の声と僕の気迫の声、小太刀の弾ける音と床が受ける衝撃音が響いた。

「今日はこちらまで！ 鍛錬は続けていた様だな。全体的に底上げ出来ているし、集中力も長い時間継続出来る様になったな!!」

結局、一本も取れなかったが左手首に一度だけ打ち込む事が出来た。

「……………ありがとうございます」

見た感じ恭也さんは汗は掻いているが、息は乱していない。まあ御神流の技らしい技は今回出していないからな。神速ぐらい使える様になれば、少しは違ってくるんじゃないかなと思うんだけど。

「カエデ！　大丈夫？」

へたり込む僕に急いで駆けつけるアリサ。

「なんとか………アリサが応援してくれたから、左手首に――
発打ち込めたよ」

男として惨敗は悔しかったが、一矢は報いる事が出来た。

「なっ！？　何言ってるのよ！？　私だけじゃなくて、すすか
やなのはも応援してたじゃない！！」

「そっだよカエデくん！！」

「私達も応援してたの！！」

「そっだな、ありがとな。すすか、なのは。」

そうやって僕は気が抜けたのかその場で寝転んでしまった。

第8話

剣士時々スコン

後編（後書き）

作者「ナデポなんぞ空想の存在だ」

カエデ「俺はそんなつもりはないぞ」

作者「むしろお前は何処までフラグを建てたんだ」

カエデ「幼少期の思い出は人生の根幹になりやすいが、恋愛感情は生まれにくいと聞くな」

作者「精神年齢の高い最近の子供は判らないぞ？」

カエデ「小学生と教師が付き合っているとか本気で思っているなら、それはエロ漫画の読み過ぎだ。現実と空想の判断が出来ない病院患者だな」

作者「最近、カエデの口が悪くなっている気がするのはいのちのせいじゃない」

カエデ「この俺は精神が年齢に引っぱられていないからな。世間の荒波を微々たる程度受けているから自然と悪くなってしまうものさ」

作者「さいですか」

カエデ「次回からどうするんだ？」

作者「後1、2話いれてから原作に入ろうと思う」

カエデ「いよいよ本編か」

作者「まあイレギュラーであるカエデの存在がPT事件にどんな変化を見せるか楽しみだな」

カエデ「自称神の研究にもなるし、かなり関わって行くつもりでい
くぜ」

作者「そんな訳で」

二人「また次回！！ ノシ」

第9話

僕は友達が少ない（前書き）

昨晚執筆

寝落ち

起きたら携帯の電池が切れてた

書き直し

バイト中に本文終了

あとがき

執筆遅れてすみません。

文章上、おかしい点があったら、報告よろしく願います。

1月11日

昼

後書き更新。

第9話 僕は友達が少ない

「そつえばカエデって男友達って居ないの？」

思えば休み時間のアリサのこの一言が始まりだった。

「普通に考えているに決まってるだろ」

「いやさ、カエデが私達以外と絡んだりしているところを見た事ないから、もしかしてって思ったのよ」

確かにこのクラスになってから四六時中この三人の誰かと話している気がする。

というか必要最小限の事しか話してないな。

「でも、1、2年の時は別々のクラスだったから、友達とおしゃべりしていると思うの」

なのはのいう通り、私立の小学校っていう理由も有ってか、近所の友達同士で話すっていうか話せる友達が少ないと思う。

クラス内で友好を持っていれば、話し相手やぐるーぷ遊ぶ事も多いだろう。

「そこまで言うなら、友達呼んでくるよ」

そういつて教室を出て他のクラスに散った友達を探す事にした。

s i d e なのは

カエデ君が友達を呼んでくると言って教室を出るのを確認すると、アリサちゃんは急いで机をくつつけて、円陣を組む様に小さく私とすずかちゃんを集めた。

「さて、カエデが居ないうちに最終確認しておくわよ」

「うちはノエルさんとファリンがセッティングしてくれてるから、問題無いよ」

「うちもパパが参加出来ないって悔やんでいたけど、それ以外は準備は大丈夫。鮫島にも昨日の内に伝えておいたから後はあっちの動きで変わるだけね」

「私の方も予定通りだったよ。お母さんに手伝って貰ってスポンジケーキを作って、フルーツとクリームと一緒にノエルさんに渡しておくって言ったの」

私達はそれぞれ担当した部分の確認をした。

「じゃあ、メインのアレの準備は二人とも出来てる？」

「うん、バッチリだよ！」

「なのも授業終わったら直ぐに家に取りに行ってくるの」

今回のメイン、なののは折れちゃうかもしれないから、家に置いてきたけど準備は万端なの。

「そろそろカエデが戻ってくる頃ね。カエデには悟られない様に、

後はあつちの動きでその場対応でいくわよ」

そういつて机を戻して私達はさっきの状態へと戻した。

s i d e

カエデ

友達の有無を問われて教室を飛びでて他のクラスを回っていたが・
・
・
・

「どうして、みんな手が空いてないんだよ」

事有ることについて行けないと断られた。

事情を説明したら、すまなそうな雰囲気から妬みの様な雰囲気に変わったのはよく分からなかったが・・・

もしかして、友達って思っていたのは俺だけなのか？

「くそう、そろそろ休み時間が終わってしまっ」

時間に文句を言っても仕方ないとは分かりつつ悪態をつく。

残りの時間も使ってはみたが・・・

「すみませんでした！」

その後、アリサに頭を下げたカエデが発見されたらしい。

そして放課後。

僕は誰かに拉致られていた。

第9話

僕は友達が少ない(後書き)

作者「バイト終わった〜」

カエデ「お疲れ、それにしても寝落ち多いな」

作者「よく無いのは、判ってるんだけどね」

カエデ「いつそ、昼間書けよ」

作者「時間が有ったらな」

カエデ「今書いている後書きはいつ書いてる?」

作者「………昼間」

カエデ「十分有るじゃないか」

作者「まあ今までニコニコしてた時間をそのまま執筆に当ててるからな」

カエデ「そうか、っと! そっぴや、こいつを見てみる」

作者「ん? 何だ……?」

魔法少女リリカルなのは
アクセス解析

次元を超えし転生者

1月10日

PV 3948アクセス
ユニーク 543人

作者「(・・・?)」(・・・)ハア!? 何これ!
? 約4000じゃないか!?

カエデ「ついでにこっちも見てみ?」

総合アクセス

PV 14679 ユニーク 2767人 (12時現在)

作者「……………」

カエデ「一週間でこれだぞ? 初投稿作品で毎日投稿の努力の結果さ」

作者「なあ、カエデ」

カエデ「何だ? 作者」

作者「まだ、本編入って無いのにこの評価って高すぎじゃない?」

カエデ「それだけ期待されてるって事だろう」

作者「そうか・・・ビビるなw」

カエデ「ビビんなよ。何回も見た内容なんだから、普通に書きゃ良
いだよ」

作者「そうだ、1万PV記念とかやった方が良いかな？」

カエデ「記念だからな、区切り付けっただけで意味でやるべきだな」

作者「内容はどうする？」

カエデ「前言った、母さん視点の話とかわ？」

作者「・・・タイトルは一瞬で思いついた」

カエデ「内容を思いつけよ」

作者「だって基本プロットなんて皆無に等しい執筆だよ？」

カエデ「物書きとしてアウトだよ」

作者「思いつくままに書いてるからな」

カエデ「これからがすげえ心配になるんだか」

作者「そうだ、いきなりだけど、アンケートしてみよう」

カエデ「唐突すぎるだよ、何のアンケートだし？」

作者「ん？ カエデの魔力的な強さを決めるアンケート。無印突
入時にどの位あった状態で参加するか決めたいのよ」

カエデ「強さで対応とかが変わるって感じか」

作者「そうだね。そんじゃ始めてみよう」

アンケートにご協力下さい。

カエデの無印開始時の魔力的な強さを選んで下さい。

- 1 .) B + (ユーノ以下)
- 2 . B +) A (ユーノ以上)
- 3 . A) A A - (クロノ以下)
- 4 . A A) A A A - (クロノ以上なのは、フェイト未満)
- 5 . A A A (なのは、フェイトと同等)
- 6 . A A A +) (なのは、フェイト以上)

締め切りは1月15日0時

1 の場合、B + 以下から希望のランクを明記してコメントに送ってください。

作者「こんな所かな」

カエデ「これで1通も来なかったら、ネタにしかなんないぜ？」

作者「そんな悠長な事言つてて良いのかな？」

カエデ「ん？ どういう事だ」

作者「もし5通以上のコメントが無かったら、アンケートの結果は無効にして独断でネタな決め方をするからな」

カエデ「はあ？ 何だよそれ？ しかもまたネタかよ」

作者「恐らく、”アレ”を使って主人公のパラメータを決める作者は殆ど居ないだろう」

カエデ「・・・嫌な予感しかしない」

作者「コメントはいつでも歓迎するけど、あえてアンケートに参加しないでネタパラメータスタートが良いって人も居るかもしれんな」

カエデ「やめてくれ〜！！」

作者「まあ、そんな感じでアンケート開始します」

カエデ「本当に沢山の！！ 沢山のアンケートを！！ お願いしま
す！！！」

作者「んじゃこの辺で」

二人「ではまた！ ノシ」

第10話 キミの笑顔は100万ドル(時価)(前書き)

遂に二桁話数!

更新は遅かったけど、その分内容は一番長いよ!

前回の後書きでアンケート始めましたので、是非参加して下さい。

文章上、おかしい点があったら、報告よろしく願います。

第10話 キミの笑顔は100万ドル(時価)

拉致られるのは、正に突然だった。

アリサとすずかが習い事、なのはは桃子さんの手伝いをすると言って掃除当番の僕を残して先に帰ってしまった。

更に日直と被ってしまい、日誌を職員室にいる担任に渡して昇降口に着く頃には、友達とお喋りする為か、グラウンドで遊んでいる為に残っている生徒しか居ない閑散とした状態だった。

周りに一人も歩いている姿がないまま校門を出た所、黒い高級車が目の前に止まり黒服の男性に捕まり、車の中に入れられた訳だ。

恭也さんには、相手にならない僕だが、一般的には大の大人にも負けない訓練はしているが……相手もプロなのかもしれないな。

現在、僕は両手を後ろで縛られ、目隠しと大音量ヘッドホンを付けられている。

周りの音や見たもので、隙があったら助けを呼ぶというのを防ぐ為

右折、左折を何度と繰り返し止まった先で拘束されていた手とヘッ
ドホンが取り外された。

周りから人が離れていく気がしたが、ヒソヒソと声はした。

「カエデ！ アイマスク外して！」

え？ 何でこんな所でアリサの声が？

「アリサ？」

取りあえずアイマスクを外す。

暗さに目が慣れていたのか、辺り全体が眩しい。そして映るのは大
勢の人、人、人。

「カエデ（君）！！ お誕生日おめでとう！」「」「」

.....!

拉致事件の真相が判明した。

元は普通のサプライズパーティーでアリサの家の執事の鮫島さんが僕を迎いに行つて、この家まで来る予定だった。・・・らしい。

しかしすずかが忍さんにサプライズの内容を話した所、恭也さんに頼んで僕を拘束。街をぐるぐる走つた後、まさに拉致つて感じて道を誘導されていったのであった。

にしても、あの黒服恭也さんだったんだ。

黒いスーツにレンズが黒い眼鏡をしてるだけで全くの別人に見えた。

「お待たせしました〜!!」

月村家のメイドさんであるファリンさんが銀色の大きな蓋が被さっている料理をカートを引いて持ってきた。

「こちらはお嬢さま達が作りました、お誕生日ケーキです」

そういつて銀色の大きな蓋を開ける。

そこにはチョコレートのスポンジケーキを彩った白いホイップクリームがスポンジの間に挟まれており、鮮やかなカットフルーツがケーキの上に散りばめられている。

「凄く美味しそうだね!　これ3人で作ったの?」

アリサ、すずか、なのはに聞いてみる。

「うん!　私はお母さんに手伝ってもらってスポンジケーキを焼いたの」

「私はフルーツを切ったよ」

「私はケーキとフルーツのデコレーションよ」

と分担して作っていたようだ。

そんな会話をしていると。

ふと3人は大なり小なり小包を持ち抱えていた。

「これ、カエデ君へのプレゼントなの!!」

そういつて最初に渡してくれたのは、なのはであった。
一体何が入っているんだろう？

入っているのは、クラッカー、ポッキー、板チョコなどのお菓子セ
ットであった。

「それは、お菓子の家が作れるキットなの。一緒に作ろう、カエデ
君！」

へえ、お菓子の家か。作って食べても、残してオブジェクトの一部
にする事も出来るのか。

「うん、なのは良いよ!! 早速明日にでも作ってみよう!!」

そういつてありがとつって頭を下げた。

「次は私ね。カエデ君！ お誕生日おめでとつ！」

そういつてすずかはホールのケーキが入りそうな大きさの箱を渡して貰った。

中には白いトレーニングウェアとウォーキングシューズが入っていた。

「カエデ君、毎朝ランニングしたりトレーニングしてるって前聞いたから、使える物の方が良いかなって思って選んでみたの」

確かに今使っているトレーニングウェアもだいぶ小さくなったし、靴も薄くなっているのは感じていたしな。
渡りに船ってこついつ時に使っただっけかな。

「ありがとつすずか！ 大切に使用してもらつよ！」

そういつてすずかに頭を下げた。

「私のはなのは物みたいに可愛らしいものじゃないけど、あなたの為に選んだから感謝しなさい！」

という、実用品かなと思いつつアリサがプレゼントを持ち上げた。そういつて持った箱はかなり大きくて、しかもかなり重そうであった。アリサ大丈夫か？

「アリサ、重いなら置いといても良いんだぞ？」

「うるさいわね！　この位問題無いわ・・・！　あっ！！！」

言わんこつちやない、倒れかけたアリサに駆け寄り肩を抱える事で、倒れるのを防ぎ箱を持った。

確かに結構重い。重さと容量からして本の類かな？

「アリサちゃん、大丈夫！？」

すずかとなのはが心配そうに近づいてくる。

「あまり無理すんなよ、言ってくれば取りに行つたぞ」

「……ても、……せつ……たかつたか……」

アリサがボソツと何かを言ったが、この距離でも聞こえなかった。

「アリサ、今なんて……?」

思わず聞き返す僕。まあいつもの通りはぐらかされると思っていた。

「……どうしても、直接渡したかったの」

耳元で囁かれるアリサの声、顔は少し赤くなっていた。

「大丈夫よ。少し重かったただけだから、怪我もないしね」

すずかとなのはに大丈夫というアリサ。

今のって……デレた？

確かに今のはデレだよな。

うわ………

めっちゃカワイイ。

その日、パーティーが終わるまでアリサの顔を見れなかった。

因みに、プレゼントの中身は………

経営学に経済学、心理学に……食育って、アリサは僕に何を期待しているんだろうか？

第10話 キミの笑顔は100万ドル(時価)(後書き)

作者「主人公、遂に落ちた！」

カエデ「そんな訳じゃねーよ!！」

作者「いや、攻略対象にフラグを建てていたら、フラグどころの話じゃなくなっただって感じか？」

カエデ「うるさい!うるさい!うるさい!」

作者「男がやってもキモいだけだぞ」

カエデ「ヴー」

作者「まあ、これからの展開が楽しみでは有るな(ニヤニヤ)」

カエデ「そういえば、アンケートはどうなった!？」

作者「まだ0」

カエデ「なんだと!？」

作者「さて、カエデの魔力はどうなる事やら」

カエデ「どうしよう!！」

作者「なるようにしかならないから、安心しろ」

カエデ「全くもって根拠が無いな！」

作者「さてと、今回はこの辺で締めますか」

カエデ「次回から本編だっけか？」

作者「そうだな、神の介入が無ければ、原作開始だな」

カエデ「自称神の介入が有るのか・・・」

作者「有るとは断言してないぞ」

カエデ「断言してる様なものじゃないか」

作者「まあそういう訳で」

カエデ「また」

二人「次回へ！ ノシ」

第11話

君の笑顔が眩しいから、13日の金曜日はジェイソン記念日(前書

今日も昨日よりか遅く公開。

でもPVは日に日に更新していく。

昨日遂に一日のPVが5000超えました！

読んでくれている皆様に感謝を。

ついでに今回は予約投稿を試してみた。

アンケートはついに2件！！

ありがとうございます！！

文章上、おかしい点があったら、報告よろしく願います。

第11話 君の笑顔が眩しいから、13日の金曜日はジェイソン記念日

誕生日パーティーの日の夜、話があるからトリビングに向かうと母さんが椅子に座っていた。

「母さん、話ってなに？」

母さんはいつも通りの笑顔で口を開いた。

「カエちゃん、お誕生日おめでとう！」

といて僕に向けてクラッカーを鳴らした。

「痛っ！ それは人に向ける物じゃないよ！」

「なに言ってるのよ。今日のパーティーでアリサちゃんに顔赤くしてたくせに。お母さん娘も欲しかったのよね。ねえねえ誰が本命なのよ？」

母さんはニヤニヤしながら聞いてくるが・・・

「本命って、そんなの分からないよ」

前世も含めて、30年位過ごしていたが未だに好きとか聞かれても正直分からなかった。

オタクだった前世は三次元より二次元と言って興味を持たなかった。

……いや、持つ事を諦めたんだっとな。

そんな俺がいざ二次元の世界に転生したから誰これ構わず、好きになる……なれるかよ。

元が二次元でも今俺がこの世界で生きている時点で三次元になる。

二次元の世界に入りたいと転生前は考えたりした。

でも今は違う。その世界で生きるという事は責任を持つ事と同義なんだと思った。

ふと自称神が言っていたことを思い出した。

「……特に主要キャラにはドンドン関われ。ハーレムなんて原作崩壊は研究に大きく進展を見せられるから、身体が保つままでやってみな」

凄く簡単に言っていたが、これってレールの上の電車を脱線させても良いが、脱線させたんだからその責任は自分で取りなってる事じゃないか。

しかもその脱線は俺が転生した時点で始まっているのだ。

きつと、三次元で好きな子がいない理由はコレだ。

自己責任

二次元はいわば空想の世界と同義だ。

だから何をやっても三次元に迷惑はかけない。

よってそこに責任は適応されない。

しかし三次元で行動を起こすと、何処かに責任は発生する。

責任は自由への糧となるが、重石にもなる。

そんな責任だらけの世界に嫌気を刺した所で俺は二次元へのめり込んだんだ。

「カエちゃん聞いてる〜？」

僕が思考の海を泳いでた事に母さんの少し不機嫌な声で気づいた。

「本当、いきなり何かを考え始めて声を掛けないとずっとそのままなのは、カエちゃんの悪い所よ」

確かに何か考えてると周りの事が聞こえなくなるな。何度かアリサにも注意を受けた事がある。

「ごめんなさい、母さん。」

「カエちゃんはそうやって悪い事は悪いと判断出来る所が良い所なんだから、今年は悪い所を治せる様に頑張りなさいね」

そういって、母さんは僕の頭を撫でてくれた。

「さてと、それで大事な話っていうのは、誕生日プレゼントについてよ」

そういって隣の椅子に置いていた白い箱をテーブルに乗せた。

「自分で開けてみなさい」

「それじゃあ……」

母さんのいう通り、開けてみる。

そこには一つの腕時計が有った。
いや、これは……

「これは……デバイス？」

見た目はアルミの様な銀色であり、長針、短針、秒針の三本の針のみがついている。

デバイスと思っただのは、書かれた数字がミッド体だからである。

「そうよ、でもこのデバイスはこう見えて凄いデバイスなのよ」

凄いつてどういう事だろう？

僕は母さんの顔を見ながら首を傾げた。

見た感じストレージデバイスだと思うんだけどな。

「そうね、簡単に言えば何でも出来るデバイスなのよ。インテリジェントデバイスとストレージデバイスの違いは何だか判るわね？」

そりゃ判るさ。母さんが魔法制御の修行をしてくれた時に最初に教えてくれた事だからね。

「インテリジェントデバイスは人工知能が搭載されていて、術者の魔法の使用の補助をしてくれる。また簡易魔法であれば独自の判断で発動が出来たりする。しかし人工知能を一から育てる必要が有る為、汎用性や生産性が低いため形状は製作時に決まっているので高ランクの魔導師でないと、使い辛い機能も含まれている」

母さんはウンウンと頷いた。

「ストレージデバイスは人工知能は搭載されておらず術式に必要なキーを登録する事で、魔法の行使が出来る。簡易魔法の自動詠唱機能はついていない。しかし、人工知能を搭載していない分魔法演算処理はインテリジェントデバイスより早く、形状の指定が出来る為汎用性が高く生産性も高い。管理局局員に全員に支給される事から、低ランクの魔導師でも使えるって所だよね」

「はい、よく出来ました！」

再び僕の頭を撫でる母さん。

他にもアームドデバイスやユニゾンデバイスが有るがインテリジェントデバイスよりも更に需要や生産性が低いため此処では省略しよう。

「このデバイスは今はストレージデバイスと同じ、人工知能は入っていないんだけどカスタム機能が付いているの。例えば待機状態と発動状態の形状の変更が出来たりするし、勿論人工知能を入れる事も出来る。」

あと、今研究されている簡易希少技能の導入や特殊体質仕様の情報も入れる事も出来るのよ」

それは……もうロストログアって言われてもおかしく無いんじゃないのかな。

「まあ、まだまだ説明しきれない程機能は有るけど、ひとまずこの位にしてこの子に名前をつけてあげてね」

と言われたが、凄く困る。

原作開始が近くなり、デバイスが必要になるとは考えていたが、いざ名前って言われてもな。

「ふふ、明日は休日だし母さんもお仕事休みだから、久しぶりにミッドにでも行く？ この子を作った設計者の所で、色々カスタマイズして貰えるけど……どう？」

と母さん。前々から結構計画を立てていたようだ。巡回船だって簡単に管理外世界に来れないから、昔のコネを使ったんだろう。

そこまでされると、行けないなんて言える訳がなく……

「まだ名前は決められないけど、明日はミッドに行くよ。ありがとう
母さん」

「ふふ、どういたしまして」

こうして俺の誕生日は終わりを告げた。

「いよう！ 9年振りだな。カエデ」

夢の中で自称神と会わなければな。

第11話

君の笑顔が眩しいから、13日の金曜日はジェイソン記念日(後書

作者「自称神が出ないから原作に突入すると思ったか！ 残念！

最後に出てきました！！」

カエデ「うわ、何こいつ。うぜえ・・・」

作者「いや、今更ながらデバイスを所持していなかった事を思い出して、急に書いた」

カエデ「そうなのか？ てっきり前回の誕生日イベントはその為のフラグかと思っていたけど」

作者「・・・あ？」

カエデ「どうした？」

作者「カエデ、いきなりダブルブッキングじゃないか(ニヤニヤ)」

カエデ「え？」

作者「第10話読んでみ？」

カエデ「(読み直し中)・・・あ！」

作者「明日はなのはお菓子の家作るんじゃないか？」

カエデ「そうだったー！！！」

作者「さてさてカエデ君はこの窮地にどう立ち向かうか？」

カエデ「書き直せ！ まだ投稿してないんだから、いける筈だ！」

作者「断る。一度書いた内容は、不手際が無い限り変更はしない。コレが此処でのルールだ」

カエデ「変更しないって、プロット書かずに書いているお前は完全に気分次第で内容決めてるじゃないか！」

作者「それが二次創作って物だろ？（ものすごい笑顔）」

カエデ「ふざけるな〜！！！」

作者「・・・あゝあ、行っちゃった。まあルミさんに頼めば何とかなるだろうに・・・そんな感じで、次回は自称神回です。（虚偽に
あらず）」

アンケートもご協力下さい。それではまた。ノシ」

第12話 努力値+経験値〃女の子？（前書き）

更に遅くなる更新w

でも更に長く本編。

あ、今回神回ですよ。

アンケートも本日までですから、お気軽に！

むしろ普通に感想を下さい！！

文章上、おかしな点があったら、報告よろしくお願いします。

第12話 努力値＋経験値「女の子？」

「いよう！ 9年振りだな。カエデ」

何でこんなにテンションが高いんだ？

ベッドに横になり、母さんから貰った真っ白なデバイスの名前を考えていると次第に眠くなつたと思つたら、これだよ。

周りは以前の様な、マトリックス的な場所だ。

「いやあ、色々と仕事の処理が一段落ついてカエデの様子を暇つぶしに覗いてみようと思つたら、原作開始直前まで経つてたから慌てちゃってね。丁度誕生日みたいだし、呼んでみた訳よ」

なんていうか前会つた時も思つたが、この自称神は本当に軽いな。

厳格なお爺さんの人とか、夢げ20台後半なお姉さんとかイメー
ジつけそうだが、チャライ全盛期のつ　く　とかそんな感じの自称
神。

「好き勝手な事考えてくれちゃっているな。何度も言つが自称じゃねえって」

「で、その自称じゃない神が何で俺を此処に呼んだ？」

大体今デバイスの名前を考えているんだから邪魔すんなって。

・・・ん？ 『俺』？

「ああ、カエデにとっては此処は夢の中だから精神は昔の君のままだ」

なんか、都合が良いといつかなんと云うか。

「俺がわざわざお前を呼んだのは、お前が全く成長してないからだ」

・・・はあ？

「成長してないってどういう事だよ。魔法は母さんから学んでいるし、鍛錬も怠ってない。確かに才能は人並みしかないから、初めからうまく出来る事なんて無かったが、努力している内にも出来る事は増えていった！！　その何処が成長してないっていうんだよ！！」

俺は激怒した。この9年間を無駄とも言われたように聞こえて。

俺は激怒した。俺が努力と思っていたことが、否定されたように聞こえて。

俺は激怒した。俺を鍛えてくれた父さん、母さん、師匠達を馬鹿にされたように聞こえて。

「神だかなんだか知らないが、良い気になって上から見下しやがって。何が研究の協力者だ。結局神にとつての人間オモチャって事かよ！！」

咄嗟に御神流の構えを取る、出せるだけの殺気を出して。

「……………はあ、君が思慮浅いのは判っていたつもりだがね、今回は俺の言葉足らずだった様だ。君の努力は勿論理解している。定期的に君の状況の報告は貰っているからね。君の鍛錬によって上昇する力、それはifの世界の高町恭也以上のものだ。あと数年で彼を超える技能を得るだろう」

・・・何言ってるんだ？

成長してないって言ったと思っただら恭也に勝てる実力を持ってるだなんて。

「君は自身のパラメータを確認してないのかい？」

パラメータ・・・

意識を自己能力の数値化へ変える。

基礎能力

知力	200	473
体力	10	274
攻撃力	10	372
防御力	10	483
敏捷力	10	183
五感	10	223
魔法力	10	50000
魔法抵抗力	10	375491
魅力	100	237
運	10	90

特殊技能

御神流	0	137
魔力運用	0	72
デバイス運用	0	0
水泳	0	73
柔道	0	29
剣道	0	117
書道	0	83
画力	0	76
球技	0	94
調理	0	270
歌唱	0	76
裁縫	0	148
センス	100	173

・ ・ ・

なんか、前みた時より複雑になってるな。
 左が転生時の初期値で右が現在の値だ。
 俺は確かに成長している。

「どう見ても、成長してるじゃないか!!」

しかし自称神は首を横に振る。

「そりゃ人として最低限の成長はするに決まってるだろう。それにキミの場合、一般人としては必ず成長はする。基本能力の9歳の平均は全能力90となっているから最低でもそこまでは成長する」

パラメータを再び見る。

「どっちにしてもそれ以上の能力になっているじゃないかよ」

「パラメータの一番下を見てみな。それが成長していない何よりもの証拠だ」

パラメータを一番したまでスクロールしてみる。

・
・
・

経験値 28400 / 10 (レベルアップ可能)

レベルアップ???

「これで解つただろうが、お前は一度もレベルアップしてないんだ
よ」

「じゃあ、今まで上がった力は一体？」

「いわば、努力値って奴だ。それがベースにレベルアップ時の能力上昇の幅が広がるわけだ」

「レベルアップする事で、俺の真の努力の結果が出る訳か」

「そゆこと、お分かり頂けたかな？」

なるほど、今まで努力してきたがそれが更に上昇するのか。

「よし、それじゃあ今からでも・・・」

「まてまて、そう急ぐな。どっちにしても此処ではレベルアップは出来ないぞ。此処は夢の中、現実とは隔離された場所だからな」

「そうか、じゃあ早く此処から！！」

「落ち着けて、何度言えば分かるんだ。それともう一つ、経過報告の為に他の神に研究の内容を聞かせたら、研究に一手間加えようと思ったんだ。まあキミのやる事は今までと変わらず、君に研究の補佐として一人付けるだけだから心配しなくても良い」

研究に一手間ねえ。やる事に代わりは無いなら別に気にしないが補佐か・・・

「おい、マリーナ君。出てきて良いぞ」

そう言っつて自称神は手を叩くと、突如扉が現れ開いた。

そこから現れたのは、10代後半位の超ロングの黒髪を纏う女の子だった。

・・・？

女の子の顔を見た途端、何かを感じた。

なんと言えば良いのか分からないが、見た事が有るとかなのか、不思議な違和感を感じた。

「マリーナって言います。よろしくね、マスター」

そう言っつて彼女は頭を下げた。

容姿は可愛い、昔見た朝のニュース番組の合間にやってたファッションモデルが流行を紹介するコーナーをやっていたが、そこに出るモデル達よりか遥かに可愛い。

スタイルも見た感じの年相応かそれ以上、某サタデーナイトな48

人に入ってもセンター取れそうだし、全体の総選挙やってもトップを取れると思う。

よくこんな人材を・・・もとい神材？ を見つけたもんだな。
自称神、アンタ本当に芸能事務所のスカウトに向いてるぞ。

しかしだな・・・

マスター？ 自称神はこの少女になんて調教・・・もとい教えを
してんだ。

「ツツコミどころが多すぎて、あえてツツコまないが、マリーナはとある事情で俺のもとに来た。そしてキミをマスターと言うのは、キミのデバイスの管理人格兼ユニゾンデバイスの素体となる容姿だからだ」

「マスターのデバイスが人工知能を搭載すれば、私の意識が。ユニゾン素体を組み込めば私の体が。マスターの世界に出るわけです」

何故だろう、自称神よりマリーナさんの方が判りやすい説明なのは気のせいだろうか？

「あら、マスター。マリーナって呼んで」

そう言っただけで彼女は近づいて手を握ってきた。

近づく彼女からはフルーツ系の爽やかな香りがしてきて、少しドキドキする。

「おーおー、原作のヒロインに好意を寄せて、寄せられているのに、こんな所で浮気か？」

楽しそうにニヤニヤしてる自称神。

マジでウザいな。

「まあそんな訳だから、彼女を頼むぜ」

そう言っただけで、俺の足元に穴が開いた。

もうサプライズにならないからか、俺の真下では無い。

(あ、そうそう。彼女も惚れさせて良いぞ)

え？

そうして足元のに在った穴は急激に広がり……

落ちた。

グッドから。

第12話 努力値＋経験値「女の子？」（後書き）

作者「いや〜神回だったな」

カエデ「主にフリーダムの意味でな」

作者「しかし今回オリキャラ登場したし、カエデがパワーアップする事になったし、色々発展したな」

カエデ「つか、レベルアップなんて初めて聞いたぞ」

作者「ああ、ふと思いついたからな」

カエデ「・・・え？」

作者「いや、パラメータ見れるって言うても区切りとか無いと分からないくない？ って思ってたね」

カエデ「お・前・の・差・し・金・か」

（しばらくお待ちください）

カエデ「ふう、それじゃ次回は現実に戻るぞまた次回ノシ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1274ba/>

魔法少女リリカルなのは 次元を超えし転生者

2012年1月14日14時46分発行